

「遊び」には傷んだ心をケアする力がある

震災により、身内を亡くしたり、避難を余儀なくされたりと、子どもたちの生活も一変してしまった。災害時には子どもたちに安心感を与え、早期に日常の生活リズムを取り戻す手助けが必要である。そして、自ら回復できる力（レジリエンス）を見守り、後押ししなければならない。東北の地が少子高齢化社会のモデルとして、新しい形の地域の支え合いを基盤に、いつでも安心してコミュニティの中で暮していけるよう、行政と企業、NPO、地域住民などが連携していくことが重要である。

｜我慢を強いられていた子どもたち

災害を経験したり、被災地の映像を繰り返し見た子どもたちには、一時的に「イライラしたり、興奮しやすくなる」、「日頃していた好きなことをしなくなる」、「眠れない」、「保育園や幼稚園、学校に行きたがらない」などの様子が見られる。『遊びの専門家（以下、専門家）』は、ストレスを抱えながらも、我慢している子どもたちに対して、「遊び場の設置」と「大人が子どもたちに安心感を与え、日常を取り戻すために寄り添うこと」が喫緊の課題であると提言し、全国に緊急支援の必要性を訴えた。

｜自ら生きる力を育む居場所、環境づくり

全国の専門家が被災地の団体の元に駆けつけ、常設の遊び場を設営し、管理運営を行った。

また、ある団体は、行政と地域の保護者とともに、「子育て会議」を開催している。会議には、市内全ての子育てサークルおよび子育て支援団体を招き、市内の子育て環境の向上や当事者目線で市の事業に対する話し合いを行っている。

同時に一般公募により参加する母親たちのための会議や、障害児の親同士の会も主催し、母親たちの意見をより反映させるため、多様な環境で子育てをする保護者と行政をつなぐ場をつくっている。

｜活動のポイント！

- 地域住民が主体の活動になることが継続的な活動の鍵。
- ブログや SNS で活動内容を発信することで、企業等からの支援を受けられるきっかけとなる。
- 「遊び場」が共働きや、ひとり親世帯で孤独になりがちな子どもの受皿も担える。
- 地域の行政や社会福祉協議会、児童相談所などと連携体制も必要。

｜参考事例

- [男女共同参画の視点からの復興～参考事例集～』No.75](#)
- [Unicef : 震災時の子どもの心のケア](#)